國の富植付けてゐる田植かな　道後　善樂
齋田に清き乙女の　〃　〃
國民に御範示して　〃　〃
赤だすき特に目につく　〃　〃
水喧嘩雨に流して　〃　〃

以下平調

五月雨や過路のなげく鈴の音　カ　吟月
戀の辻占闇を縫ひ　〃　〃
鳳れがちなる鶯の卵　〃　〃
たゝかしてゐる菅の笠　〃　〃
日數古家の軒そぼち　〃　〃

五月雨や絕え〳〵の水あぜを越え　カ　吟月
青梅肥える若葉かげ　〃　〃
つれ〴〵友に文送り　〃　〃
昔の戀を呼びもどし　〃　〃
ぶぜうに見舞ふかびの客　〃　〃
戀といふ字を灰に書き　〃　〃
不二をさかさに水かゞみ　〃　〃
さゞら水波岩を越え　〃　〃
柴の庵の玉だすき　〃　〃
けぶる朝の花あやめ　ア　白嶺
頭重たき病ひ竹　ア　道樂

五月雨や辛き汗かく蝗秤　ア　道樂
灰の中なる落し錢　〃　〃
焦げつくらしき鍋のもの　〃　〃
飯粒踏みし足の裏　〃　〃
磯に伏せたるうつろ舟　〃　〃
錆つき明かぬ納屋の錠　〃　〃
鍋焚きつける舟世帶　〃　〃
鹿島へ廻る潮來舟　〃　〃
女氣のない寺座敷　〃　〃
倉の隅なる古蔓籠　〃　〃
三五の月も薄化粧　道後　崎月

五月雨や銀糸のすだれ窓の外　道後　崎月
柳の糸に銀の玉　〃　〃
青竹のぼる雨蛙　〃　〃
野路ゆきくれて蛙ふみ　〃　〃
すげ笠ならぶ水田の面　〃　〃
思出多き角行燈　〃　〃
軒にかけたる麥の束　〃　〃
給桑になやむ養蠶家　今治　百井
瀨戸の島々かげうせて　〃　〃
鈴がら家内かけまはり　道後　善樂
琴の音を聞く軒燕　〃　〃

五月雨やしんみり話す夫婦仲　道後　善樂
〃　夢の國なる瀬戸の海　〃
〃　妻はひねもす針仕事　〃
〃　隣りの猫の來る時分　〃
〃　遠音に響く暮の鐘　〃
〃　煙る田の面の早苗とり　〃
〃　晴れて目覺むる青葉山　〃
〃　道草茂る綠泉寺　松山田郎
〃　溪道戻る二人連れ　〃
〃　地上を洗ふ神の意志　〃
〃　葉のいさかひに落つ雫　〃

五月雨や門燈淡き百姓家　松山田郎
〃　主なき家の多き村　〃
〃　三味のもれ來る橋の上　〃
〃　旅情安らふ一日暮れ　〃
〃　溪水かさみ瀨音鳴る　〃
〃　道の敎へを聞く夕べ　〃
〃　救主に扈從の日は暮れぬ　〃
〃　其まゝ其日暮れにけり　〃
〃　送らる吾と送る吾　〃
〃　海路靜かに皈る救主　〃
天蓋のまばゆき悠紀の田植かな　ア　道樂

狹田長田高田窪田の田植かな　ア　道樂
むかもゝに泥かきよせて　〃
八雲立つ出雲振りなる　〃
苗見れば風いさぎよき　〃
次ぎ〳〵に綠擴がる　〃
天地に新顧をこめる　〃　道後　畸月
早乙女も古武士姿の　〃
急がしい猫の手もほしい　〃
早乙女の身魂淸めて　〃
天地のめぐみで今日の　〃　今治　百井
天地に新りをこめて　〃

旱天に一雨ふりて田植かな　今治　百井
赤襁ねえさんかぶりて　〃
赤き裾白き脛見せ　〃　道後　善樂
早乙女の唄にはかどる　〃
雨けぶる中に乙女の　〃
水分の神の惠みに　〃
小判形に笠をならべて　〃
長閑なる歌調流るゝ　〃
のんきそに見せてせはしい　〃
雲路別神の命の　〃
早乙女の不二をうつして　〃

‖附錄 終‖

‖以 上‖

昭和三年七月六日印刷
昭和三年七月十日發行

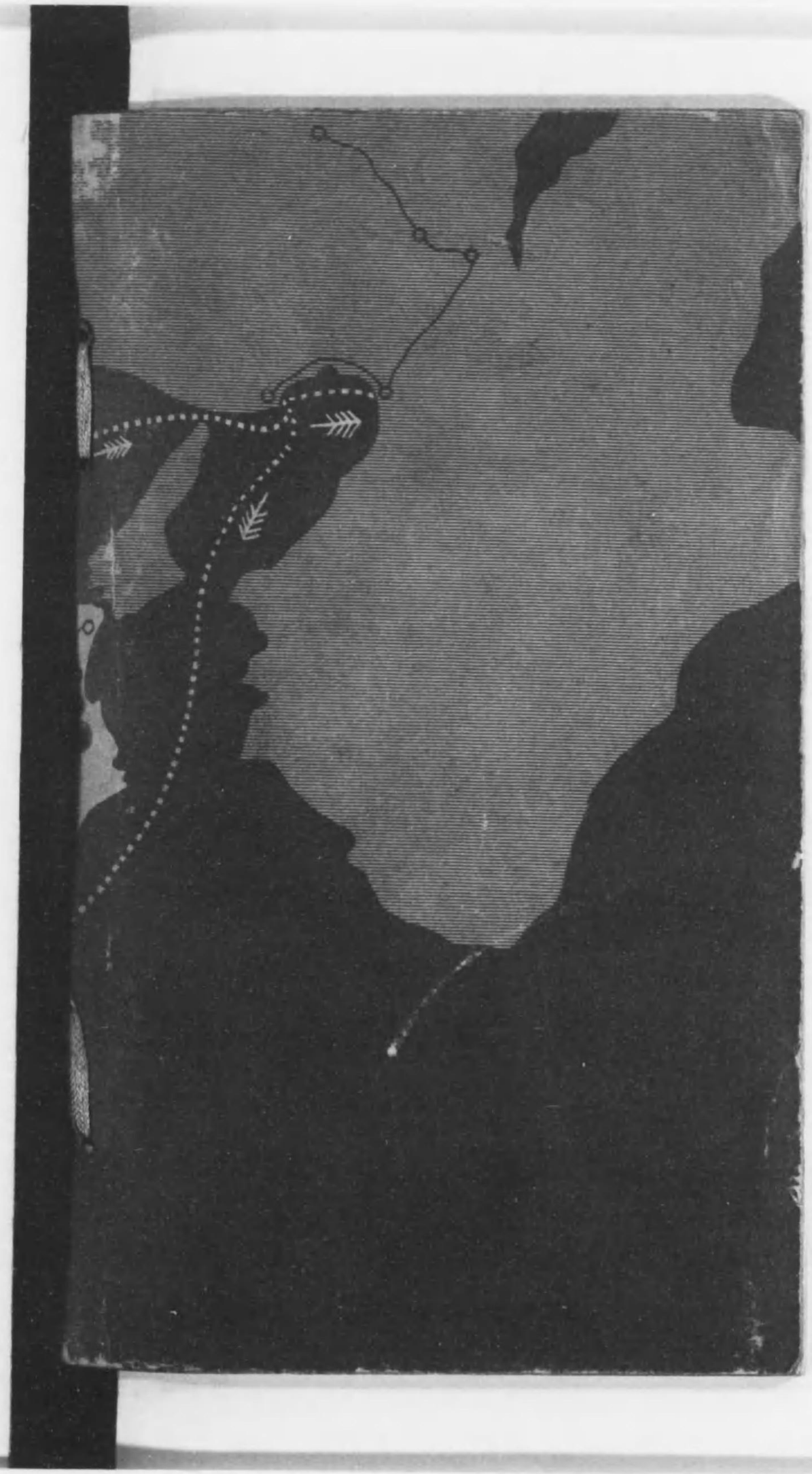
二名日記與附
定價 壹圓六拾錢

不許複製

編輯者 京都府何鹿郡綾部町大字本宮村字本宮下三十二番地 藤津進

印刷兼發行者 京都府何鹿郡綾部町大字本宮村字東四ッ辻十三番地 爪生鎌吉

印刷兼發行所 京都府何鹿郡綾部町大字本宮村字東四ッ辻十三番地 天聲社

振替口座大阪六〇五三四番

終